
あいら姫の手にキスを。

月野翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいらり姫の手にキスを。

【Nコード】

N0073G

【作者名】

月野翠

【あらすじ】

千草あいらり。男。最近の悩みは・・・あいらりのハートをねらい、色々やりまくっちゃう学校の人達だった！摩訶不思議な学校を舞台に、王子・生徒会長・マフィア・・・などがあいらりに猛烈大アタック！あいらりのハートを手にするのはだれだ！

そんな聖とオレは、同じクラスなうえに・・・席が隣どうし。
・・・・・・・・・・授業中、セクハラしてくんだぞ!?

SOSをオレはだしてんに、クラスメートの男子達（聖以外はみんなノーマル。たぶん。）は・・・。

「なんか、お前ら・・・ほほえましいなあ・・・。」
とほのぼのタイム。

頼むから先生までほのぼのしないで・・・・・・・・・・!
オレの必死の思いはいつだつてとどかない。

だけど、聖よりワンランクぐらい上のオレの悩みの種もあるんだよなあ。

ピンポン

「千草あいりさん。今すぐ生徒会室にきてください。」

突如、聞こえてきた高い声。オレにとっては悪魔の声。

しかしオレはその命令を無視。

生徒会室に行ったとたん・・・・・・・・・・
くわれる。そりゃもう絶対。

「なあなあ、行かなくていいのか?」

オレの友人、古田^{ふるた}。こいつはノーマルだからいろいろと安心できる。

「行ったらヤバいだよ。」

「行かなくてもヤバいんじゃない?」

「・・・・・・・・・・。」

「行かなかつたらこのクラスにまで被害がおよぶんだよねー。ま、今数学の授業だからいいけど?」

「・・・・・・・・・・。オレの貞操の危機と、クラスの被害、お前ど

「つちがいや？」

「クラスの被害。」

「はやっ！今超即答だった！」

「だっていやなんだもん」

「お前さあ……。」

そんな時またもや。

ピンポン

「あいり、今大人しく僕のところにくるか……。

帰り道拉致られるのと、どつちがい？」

………行つてこよう。

「へい、ファイト！」

「気楽にいこうぜ。」

「がんばってこいよー！」

他人事だと思つて……！

「まあ……がんばって」

だから先生まで言わないで！しかもそんなおちやめに……！

「あいり姫……。俺もついていこうか？」

「いい。結構だ。（即答。）」

「………照れ屋な姫。」

だれが照れ屋だ。

とにかく聖から逃げてオレは廊下にでた。
やばい。足が震えてる……。

生徒から、「血まみれ会長」と呼ばれているあの人。

敬語をつかってないってことは……………

鬼畜モードONの状態。

……………怖すぎる。

オレの貞操……………
どうなっちゃったの!?

恋する血まみれ会長〜その1〜

いつ見ても、立派すぎるドアだ。

オレ（別名哀れすぎる子羊）は生徒会室の前に立っていた。

ここで少しだけ「血まみれ会長」こと二葉琴紀ふたばこときの説明をしよう。

二葉会長は、1年・2年と・・・不良だったらしい。それも、ボスなみの。

金色に髪染めて、バイクで校舎内走りまくって、ケンカばっかして。

「不良のボス」として、崇められたり、罵られたり、とにかくすごかったらしく・・・。

「警察も匙をなげた不良」とか「二葉が学校をつぶす」とかすんげえ噂が出まくったらしい。当時は。

そんな二葉会長、3年の4月に・・・

大変身した。

金色をやめ、「元」の濃い茶色に髪の色をもどした。

制服をちゃんと着て、授業も毎日出るようになった。

不良グループも、もちろん解散した。

先生どころか、1・2・3年生全員に敬語を使うようになった。

そして、生徒会長になった。

もともと人を惹きつける力・・・カリスマ性があったのだろう。みんな納得した。

そして、6月ごろ・・・もう二葉琴紀が不良だった、ことなんて忘れ去っていた頃。

制服にべったりと返り血をあびた二葉会長が登校してきた。

先輩の話によると、「まじでみんな固まったな。・・・まじで」らしい。

その返り血の説明を、二葉会長は笑顔をキープしつつ、こう言った。

「昔」の人たちが、少し暴れていたもので・・・。ごめんなさい。

その瞬間を、先輩はこう語る。

「（・・・目が笑ってない・・・!）」

・・・いわく、「あの時ほどみんなと思いが一緒になった日はない」。

そんな二葉会長は、尊敬と・・・恐怖をこめて・・・

「血まみれ会長」と（ひそかに）よばれることになった。

そして、こつからがオレが話したいこと。

やはり、みんな「どうして二葉があんな変わったのか」を知りたくなる。

その疑問に答えたのは、不良時代の二葉会長の右腕であり、現・生徒会会計の織嶋さんだった。

……オレが説明すると、なんか変なことになりそうだから、先輩から聞いた織嶋さんおじまの言葉をそのまま使わせてもらおう。

あ、今まで何度か話にでてた「先輩」については後ほど説明します……。……はあ……。

(織嶋さんの言葉)

「会長が……4月の初め……。まだ「今の状態」になってない時、ポツリと言っていたのだが……。

「……あいを手にいれるには、俺もなんとかしなくちゃかあ……。」

と……私は寒気がしたよ。そしてそのあと、ニヤリと笑ってからこつ言った……。

「あいり……どんな声で……鳴く、のかなあ……。」

……私が話せるのはこつまでだ。」

その後、オレはまだ入学したてで戸惑っている間に。

本人もしらぬまに、「血まみれ会長」の標的」ということになっていた。

そして「標的」になっていることを知った運命の日。

「……………おおおおおおいいい！！！！！！んだそりゃ！

！！！！！！！！

はじめ、そう叫んだ。まじで叫んだ。

しかしその翌日から、毎日「生徒会室に來い」の放送。

はじめ、二葉会長に会った時は、「なんだ、優しい人じゃないか」と思って「オレを好き」っていうことは無しで、好感がもてた。

しかしオレは甘かった。

それはある日のこと……………。

オレのクラスのやつについて少しオレは話してた。

そしたら……………。聖のことを話したあたりで二葉会長の顔つきが険しくなってきたんだ。

オレはそれに気づいて、「どうしましたか？」って聞いてみた。

「……………あいろは、僕の。」

「え？」

押し倒された。

一瞬にして。

この血まみれ会長腹黒悪魔閻魔大王様はますます腹黒い笑顔になりやがった。そして

「ちよっ……二葉会長、やめてください！」

「んー、やだ。」

あるうことか、オレのシャツのボタンをはずしにかかった。

もう危険値大絶好調だよ！人生の、貞操のピンチすぎる……！！

「二葉会長！ やめろつてば……！」

「先輩に敬語がつかえないこは……おしおきだね」

だんだんと二葉会長の顔がオレに近づいてくる。

綺麗な顔が近づいてくると、貞操の危機で心臓がフル回転。

ヤバイ。このままじゃファーストキスと貞操が奪われてしまう。

「やっ……！！！」

ゴスッ！

「……大丈夫か？」

目の前にあった二葉会長の顔が遠のいていくとともに聞こえた低い声。

「……なにすんのさ、竜理い……。」

「なにをしているのか、はこつちが言いたい。あと、甘えた声をだすな。ウザい。」

「ひびっ……。」

副生徒会長の、おかじまたつり岡島竜理さん。

二葉会長の不良時代からの友達で、俺より10センチも背が高く、案の定、美形。

「あのお……。」

「ああ、千草大丈夫だったか？」

「はい。ありがとうございます。」

わりとこの人は、（変人だらけのこの学校では）まともに見える。

「……好きなやつが襲われかけているのを傍観できるほど、俺はバカじゃない。」

「……助けてくれたから、今の言葉はスルーしておこう……。」

そしてしばらく二葉会長と岡島さんが言い争っているのをポーツ……とながめていたら、突然二人の動きがとまった。

「?」

オレを見おろして停止している二人に首をかしげる。

そうしていたら、二人は頬をほんのり桃色にそめて、さとすようにオレに言った。

「あいり……。そんな涙目で。」

「上目使いで。」

「制服乱れまくりで。」

「首をかしげてたら・・・。」

「絶対誰かに襲われる!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

実際襲ったのは二葉会長じゃないですか!!!!!!!!!!

・・・オレはそう言いたかったが、その後が怖い。

そしてオレは「あいのりのヴァージンは僕がもらう」とか「いや、千草のヴァージンは俺がいただく」とか言ってる二人に小声で「失礼しました。」と言って生徒会室をあとにした。

・・・誰が男なんかヴァージンを奪われるか！

まあ、そんなことが昔あったわけさ。

その日以上に危うい事が起こった日はなかったけど・・・。

しかし油断できない。

二葉会長も岡島さんも腹黒さが日々レベルアップしてるし。

・・・そんなわけでオレはついにドアノブに手をかけた。

どうか、神様仏様その他のいろいろな神様達よ。

今日もなにもないように！！切実に願います！

オレの先輩。

「し、失礼します。」

オレは多少緊張ぎみに、ドアを開ける。……いつでも、変態を殴れるように構えながら。

そして、目の前にあったのは……ダブルベット。と二葉会長。

「……失礼しました」「あいり遅刻だね 今日こそおしおきしちゃうか？」結構です。それより、あのベットは……？」

「もちろん、僕とあいりが愛し合うためのベットだよ。」

頭が痛い。

つか、生徒会室にこんなもんつくっていいのかよ!?

「学校からちゃんと許可はとったからね。」

人の心を読むな！そして学校許可すんなよ……。

「え〜と……何の用なんでしょうか？今日は……。」

ここに何回も呼び出し（という名の脅迫）されているうちに「おきまり」となってしまったこの言葉。……まあ、いつも、「今日こそやる」とかなんだけど……。

「うん。やる。」

「お断りします。」

「……今日は、ローター+バイブ+媚薬のセットだよ。」

「お断りします。」

「ぶづ……。」

そんな危ない3セット……。しかし、どこで購入するんだ？

キイ

「おい、二葉……と、やあ。千草。」

「あ……こんにちは。」

生徒会室の狼その2・岡島さんの登場。……危険値+500。

「あ、竜理。ちょっと意見を聞かせてもらいたんだけど……。」

「なんだ。くだらないのだったら、何も言わんぞ。」

「うん。あいりには、「セーラー服+ツインテール」「メイド服+ネコ耳」どっちがいいと思う？」

「どちらかといえば、「メイド服+ネコ耳」だな。」

即答しないでください!!!それこそ「くだらない」「じゃないですか!!!」

「ふーん……僕は、ツインテ好きだけどなあ。」

「……メイド服のほうがいいだろ。」

「俺でそんなこと考えるのはやめてください。」

「えーでも、夏のセーラー服着せたら、めちゃくちゃ可愛いと思うけど。」

「でも、ネコ耳も捨てがたいだろうが。」

「無視ですか。」

「ツインテでツンデレプレイもいいじゃん。あいはもうツンデレだけだね。」

「ツンデレというよりは・・・天然か？」

「むしろ健気受けじゃないですか？」

「ああ、それもそうか・・・って！」

「・・・先輩!!!!?????」

「・・・びっくりした！」

突如、生徒会室に現れた黒髪ジャージで長身の爽やかな美形男子。

この人こそ、俺の先輩・・・みなみむぎほ南麦穂。

情報通で、頼りがいのあるサッパリとした性格。

。運動神経バツグンで・・・誰にでも優しい。まさに「理想的な男子」。

まあ、当たり前のようにモテまくっていて、毎日女子からの告白がくるなか。

なにを間違えたのか、俺に恋したらしい。

先輩いわく、「一目見た瞬間、キューンってきた。」・・・一目惚れ。

その後俺が同じ部活に入ってきて、狂喜乱舞するほど喜んでたらしい。

そして今、二葉会長や岡島さんのように、「スキあらば襲う」ではないけれど「スキあらばセクハラ」状態になっている。

とまあ、先輩のプロフィールはこんなところだ。

「3年C組南麦穂。どこからはいった？部屋のドアは俺がきたとき鍵を閉めていたはずだ。」

・・・なんか、うつすら怒っている？

しかしそんな岡島さんなど気にしないで笑いながら先輩は天井のほうを指差した。

「窓。から・・・入った。」

「「窓・・・?」「」

窓のほうを見る。・・・先輩よりかなり小さく、しかも高い位置にある。

さらにここは3階。普通の人なら、この窓から入ってくるのは、不可能だけど・・・。

「あいつのためなら、火の中・水の中・・・ジャングルから宇宙空間まで大丈夫だぜ!」

「…………この人なら、俺への「愛のパワー」とやらでいっちゃ
いそくなきがする…………。」

「んじゃ、あいり…………行こっか。会長・副会長さん達、失礼しま
した。」

軽く呆気にとらわれている会長達を気にしないで先輩はオレを去ら
っていった。

……………というか、お姫様だっこはやめてください先輩…………

甘くてコワイ人・・・

「なあ・・・あいら。」

「なんでしょうか先輩」

今、オレは先輩にお姫様だっこされながら、教室に向かっていくところ。

「あいらってさあ・・・。」

先輩はどうしたのか、いつになくキレイのない口調。顔もなんだかアンニュイな感じ？

「正直、誰が好きなんだ？」

「・・・は？」

「だから、二葉会長とか、岡島副会長とか、聖のやるうとか・・・
いっぱいいるじゃん？あいらのこと狙っているやつら。そんなかで、
誰が一番好き？」

「みんな嫌い・・・です。」

「えっ・・・。」

あちゃ。なんだか先輩ショックうけてしまったか？

「・・・俺のことも？」

「（性格面を除けば）好きですよ？先輩のことは一番（あのオレを
狙う変態達の中では）。」

「!?!?!」

「？（オレ、なんか変なこと言ったかな？）」

先輩は、どこか焦点のあわない目で顔を赤くさせながらニヤニヤしていた。
すると。

「マイ・スイートハニー あいり〜〜〜〜〜!」

大声でこっぱすがしいよび方をするやつがむこうからきた。・・・
聖だ。

・・・先輩がチツと舌打ちをしたような気がした。・・・
空耳だと信じよう。

「あいり!大丈夫?会長に犯されてない?」

「だれが犯されるかボケ」

「ああ・・・よかった・・・って、麦穂先輩?なーに俺のあいりをお姫様だっこしてるんですか?」

「勘違いもここまでいくとすごいな。何が「俺の」あいりだよ(黒笑)」

「麦穂先輩こそ、後輩の彼女とるなんて大人気ないですよ。アハハハハ(黒笑)」

怖い・・・怖すぎるよ・・・。

「1・B千草あいり、沢北・ユカナ・聖2・C南麦穂・・・授業にでないでにゃにゃっているにょん?」

「!」「!」「!」

言い争いを続けていた聖と先輩は、ピタリと会話をやめ、おそろおそろ振り返った。

そこにいたのは、まっしろな髪かみの少年。大きな瞳ひとみがかわいい。

しかし、この人は知る人ぞ知る。

わが学び舎のキュートでデンジャラスな校長。

夢毬林檎むまじりんご様なのだ。

第一印象は、いかにも可愛らしく、とても愛らしい無邪気な少年。しかし俺達は知っている。この人の本性を……………。

ドS 非情 冷酷無慈悲 みんな俺のもの思考 腹黒 策略家 詐欺師 などなど……………

この人の怖さにはさしもの「血まみれ会長」もかなわない。

気に入らないやつは殺せ。好きなやつは略奪してでも俺のもの。

そんな最凶・最恐さまの最近の考え事。

「千草あいを俺のものにしよう」

・・・つくづく、ぶっとんだ男達にモテまくる星の下に生まれてきた俺自身が、恨めしい。

そんなわけで、今俺をお姫様だっこしたまま固まっている先輩に絶対零度の微笑みをむける校長様なのでした。

「南麦穂、なんであいをお姫様だっこしているのお〜？」

甘い口調の中には、（はやくあいをおろしやがれカスガ）という言葉が含まれている気がした。

「え・・・あ、はい」

わたわたと俺をおろす先輩。・・・顔が青いよ、先輩。（その気持ち、よくわかります。）

「じゃあ、はやくみんなそれぞれの教室にかえりなねえ。」

そういつて、クルリと俺達に背をむけ立ち去っていく校長様。しかし何歩か歩いた時、立ち止まっただけで固まったまま動けない俺達に言った。

「手を出したら消すからな？」

学校内で、一番危険な俺を狙う人・・・。

腐女子と先輩と俺と・・・。

なんとか、今日も貞操を守れた・・・。（しかし毎日貞操の危機を感じる俺ってどうなんだ）

「じゃあな。あいりー!!」

「おう、じゃあな。」

「あいり、これからホテルにでも・・・。」

「だが断る」

聖のお誘いを俺は容赦なく切り捨てた。

「・・・でも、なんとなく聖をシユン・・・とした感じで帰らせるのは良心が痛んだから、「じゃあな。また明日。」と言っておいた。」

とたんに、晴ればれとしたい笑顔になる聖。

これが女相手だったら悩殺モンだが、俺は男なので悩殺はされない。

まあ、美形がいい笑顔したら誰だって気になると思うけどね。

前日の雨で少しぬかるんだ校庭を歩いて行くと、ここ男子校では珍

しいやつが見えてきた。

「あ・い・り~~~~~!!!!!!」

華奢な体型からは考えつかないほどの大声。

茶髪でショートカット。大きくてクリツとした目が特徴的な、可愛い女子。

こいつは、俺の幼なじみ……孝美真琴。

真琴の姉の琴音ことねさんと、真琴と俺は小さいころからいつも一緒だった。

ご近所さんで、ありきたりだけど第二の家族のようなもんだ。

俺は男子校、真琴は女子高、俺達より二つ年上の琴音さんは有名な共学のところ……と、学校はバラバラだけどな。

しかし……。最近、大変な事実が発覚した。

真琴は、腐女子であった。

そして真琴は・・・俺が通っている「男子校」に非常に憧れていたらしい。

真琴いわく、

「男しかいない男子校・・・！！私達腐女子おとめにとっては、まさに聖地・・・！めくるめくBLの世界・・・！エロで青春で甘くてヤンデレでツンデレで甘酸っぱくて切ない恋が大豊作の男子校・・・！！」

「男子校ではそんなことひとつもないぞ。みんなふつうに女の子のこと好きだぞ。」と説き伏せてやりたかったのだが・・・。

俺自身、男たちにモテまくっているからなんとも言えない。

そんなわけで、真琴は「あいりと一緒に帰る」という目的で男子校に毎日かよい、あわよくばイチャイチャラブしている男たちを見つけようとするのだ。

まあ・・・まだホモカップルとやらは見つかっていないみたいだが。

「あいり・・・だれかなんか甘くいオーラ発してる男たちいなかった？」

王子に愛の言葉をささやかれ、生徒会長と副会長に犯されそうになり、先輩にお姫様だっこされ、校長先生に「俺のもの発言」をされ、ふたたび王子にホテルに誘われた可哀想な男の子ならいたぞ。

そんなことを言ったら、かなりカンがいい真琴は……俺が
いわゆる「受け」な同人誌を大量につくるだろうな……
（想像するだけでも恐ろしい。）

もっとも真琴は絵が壊滅的に下手だけどね。

「真琴……。そんなやつは男子校にはいない！」

「……。いや、いるね……。多分すごく近くに。」

俺は、ドキツとした。……こいつは、本当にカンがいい。

もしかしたら、気づかれる日もそう遠くねえかもな。

「ん、まあ、いいや！んじゃ、帰りましょーか！」

「おう。」

そして、今日も夕暮れの帰り道を二人でふざけながら歩く……。はずだったんだが。

最悪のイベント発生。

「おい！お前もしかして前の楽輝中で同じだった……。孝美真琴！？」

「あゝ！麦穂先輩じゃないですか！」

え。

「あつなんだあ〜！麦穂先輩、あいりと同じところだったんですか！」

「真琴、お前あいりと知り合いなの？」

「ええ、まあ。」

「あ……え……せ……ま……」

客観的に見れば、壊れたロボットのような俺。

「私と麦穂先輩は、前中学校で同じ部だったんだよ。私はマネージャーだったけどね。」

もう真琴の声も耳には届かない。

もしここで先輩が俺にセクハラでもしたら。

真琴にバレる。かなり腐女子達の人脈がある真琴は、すぐその腐女子達に俺のことを言うであろう。俺が、ホモとして全国に知れ渡る。俺が同人誌に出される。

……ぜひとも回避したい事実だ！

「じゃ、じゃあ……真琴帰ろうぜっ！」

「え〜久しぶりだし、麦穂先輩と少し話してから帰る。」

それじゃダメなんだって!!

「悪いけど、あいり先に帰ってて!」

「.....悪いね、あいり。「彼女」との帰り道邪魔しちゃって.....。」

なんとなく、先輩の瞳が冷え冷えとしている感じがするが、俺はあまり深くは考えなかった。

そして、校庭の隅に設置されているベンチに二人は行ってしまった.....。

ああ!グッバイ、(とりあえずは)平穏な日々よ。ハロー、全国の腐女子.....。

嫉妬に満ちたオレの心（前書き）

麦穂先輩視点です。

嫉妬に満ちたオレの心

帰ろうか、と思った時。

突如響いてきた女子の高い声。……あいをよぶ声。

「今日もあの可愛い女の子いるぜ。」

「千草のこといつも待ってるんだよなあ。」

「やっぱ、彼女？なのかな。」

……女の子 可愛い 彼女。男のオレには、どうしても手にいれられないもの。

あいらだって、あんな……可愛い子がいいんだろうな。

普通に、「好き」と言えるような子が。

オレは、同性愛者だったわけじゃない。

ただ、「あいら」という人が大好きで。

そのあいらがたまたま同じ男だったというだけのこと。

もう他の人の目なんて気にしない。

ただ、あいを手にいれられればいい。

だから………

彼女がいようと、俺は諦めないから。

覚悟しておいといてな？あいら。

ひとまず、その彼女とやらを見に行くことにした。

まず、敵をよくしれってことだ。

近づくにつれ、なんとなく……その彼女とやらがよく知っている人物とかぶってくる。

………孝美真琴。

女子男子関係なくみんなから好かれていて、たまに変なところを見せるカンのいい女子。

思わず懐かしさからか、声をかけてしまった。

「おい！お前もしかして前の楽輝中で同じだった・・・孝美真琴！？」

振り向いた女子の顔は、間違いなく中学の時後輩だった真琴。

「あゝ！麦穂先輩じゃないですか！」

ニパツッと、変わらない笑顔を見せる真琴。

隣にいるあいは、とんでもなくアタフタした様子。

・・・彼女がいるから？

心の中が、黒いムヤムヤしたものでいっぱいになる。

オレは、真琴に嫉妬してる。

「えゝ久しぶりだし、麦穂先輩と少し話してから帰る。」

あいと真琴をポーッと見つめている間に、真琴はオレと少し話をしてから帰ることにしたらしい。

あいがものすごくアタフタしているのを、横目に見つつオレは真

琴と共にベンチのほうへむかった。

「いや〜しかし、あいりと同じ学校だったなんて!」

「真琴、あいりと仲良いんだ?」

「うん。かれこれ3歳ぐらいからの典型的な幼なじみってやつです
!」

「ふ〜ん……。」「

その後は、中学時代の懐かしい思い出話をしたりして、けっこう長く話してしまった。

「そろそろ寒くなってきましたし、私ここで失礼します!」

「おう。またな。」「

真琴は笑顔で小走りぎみに去って行った　　と　　思っていたらこ
ちらを振り返り、まじめな顔で、オレに向かって言ってきた。

「どんなに敵が強くて、多くても・・・ただボールを見つめて、
走りつづけていってください!」

それだけ言うと、今度は本当に真琴は去って行った。

.....思い出した。

『どんなに敵が強くても、多くても・・・ただ、ボールを見つめて走っていきゃいいんだよ。』

中学の時、オレが真琴に言った言葉。

真琴の言っていることは、「ボール」を「あいり」に変えて考えろってことなのか・・・？

まったく。

真琴は本当にカンがいい・・・。

嫉妬に満ちたオレの心（後書き）

なんか、麦穂先輩黒い？

さらに、今だに麦穂先輩とあいのりやっている部活が決まっていな
いという・・・。（たぶん、サッカー部かバスケット部あたりだと思います
けど。）

美少女腐女子の暴走！（前書き）

あいろはほとんど出てきません・・・。

美少女腐女子の暴走！

俺は先輩と真琴のことがかなり気がかりで、俺は真琴の家の前で真琴が帰ってくるのを待ち構えていた。

「……………つくしゅん！」

寒くなってくしゃみがでたところ、真琴がやっと帰ってきた。

超キラキラ ハッピーな笑顔で。

「おお、あいり！な〜にしてんの？」

「ん、ああ……………お前、先輩となに話した？」

その他色々

「？思い出話とか、友達のこととか。」

「「その他色々」までの間はなんなんだ。」

「にゅ〜？なんでもありませんよ。」

「……………何か、先輩から変なこととか話されなかったよな？」

「ん？なんか、知られたくないことでもあるのかい？」

真琴センサーが起動してしまった。これは逃げなければ！

「いや……………なんでもないんだ。すまん」

「ふ〜ん……………」

危なかった……………。

「くしゅんっ」

「おや？あいりくん、風邪でもひいたかい？」

「んなわきゃねーだろ。」
「そう。じゃあね！また明日！」

おう。と一言だけかえしておいて、オレは自分の家に帰った。

そして、次の日

「・・・風邪ひいた・・・。」

38度5分。頭は痛いし、フラフラする。

「あいり、真琴ちゃんが「お大事にね」って言ってたわよ。あと、
琴音ちゃんからも、果物頂いたわ。食べる？」
「・・・りん」

オレはまだこの時気づいてなかった。

悪魔が、オレの学校にむかっていたことを・・・。

「あいりが来ない。」

「あゝあいりに会いたいあいりに抱きつきたいあいりにキスしたい

あいりを犯して「自重しろやボケ」

今、ここ 生徒会室には、総勢5名の男たちがいた。聖、

二葉琴紀、岡島竜理、南麦穂、夢毬林檎の5名だ。

その集まった男たちの全員が、あいりのいないことで無気力状態になっていた。

いつもなら一瞬即発で始まる「あいりは俺のもの合戦」も今日はおきない。

「あいり〜。」

「あいりあいりうるさいですよ会長」

「黙れ羽虫」

無気力なムードがただよっている中で、静寂をやぶるドアをノックする音が響いた。

「失礼しまーす。会長〜。」

「あー君は久々登場の古田くん。何のよう?」

「学校内に女子が入っているんですが……。」

「そんなの、いつもどおりつまみだしておけ」

「いつもどおり」というのは、この学校美形が多いため、必然的に女子がけっこう学校に来る。

普通は、学校の周りをつろちよろしているだけだが、たまに暴走する女子がいて学校内に侵入してくるのだ。

「はい。」

古田が出て行ってから数分後、いきなり学校放送が鳴り響いた。

「そんな声ださないでよ。岡島竜理さん？」

「・・・なんで俺の名を知っている・・・」

「他の人のも知ってるよ？その金髪王子が聖くん。一見可愛らしいが実は超非道なのが林檎校長先生。その先生うけがよさそうなのが琴紀くん。で、麦穂先輩・・・だね！」

「・・・（汗）」

「腐女子の情報網・・・なめんなよ」

いつもは余裕のこの学校最強グループの人達だが、この時ばかりは目の前で明るく微笑む悪魔に冷や汗をながして固まるしかなかった。

「・・・で、目的はなんなのお？」

いちはやく立ち直ったキュートな校長は、なんとか笑顔をつくって真琴に問いかける。

「うん。あのね、自由に私がこの学校にはいれる許可だしてくれませんか？」

「・・・真琴、お前それだけのためにこの学校に侵入したのかよ・・・」

行動力のよすぎる後輩を麦穂は恐ろしく思った。

「今日だってさー防犯カメラぶっこわしてフェンスよじのぼって警備員スタンガンで気絶させて、門をピッキングしてようやくはいれたんだよー。」

「スタンガン・・・」

過去でフェンスをよじのぼった女子はいるものの、スタンガンで警

備員を気絶までさせた女子はいない。

「……………末恐ろしいな、お前。」

「うふふふ。まーね まあ、それより許可お願いしま〜す！」

「別にしてはいいと思うんだけどさ、君みたいな女子生徒がはいってきたら男子校だしやっぱりなにかあると思うんだよね。（まあ、この子は「なにか」あったら色々とヤバそうなことしそつだよな……………そつちの方が問題だな（汗））」

かつこの中の言葉は心の中でひそかに言いいながら、二葉琴紀は真琴を諭すように言った。

しかし。

「許可してくれたら、あいらの「マル秘写真」売るのにな……………」
『……………?』

ピカーン！と、音が本当にでそうなほど5人の男の目が輝いた。

「小さいころの写真とか、風呂上がりの写真とか、天使のような寝顔とか……………」

「……………半裸写真とか。」

もうその一言で、5人の心は決まっていた。

『許可する』

次の瞬間、真琴は最上級の笑顔になり、「ありがとうございます！」と頭を下げた。

「じゃあ、写真頂戴？」

目を細めながら聖は真琴に極上のスマイルで言う。

女なら誰もが恋におちてしまいそうな悩殺笑顔だが、さすがは真琴といったところか。まったく動じていない。

「あげるなんて言ってます。私は「売る」と言いました。」

「……………え。」

「王子ですから、10万ぐらい軽くだせますよね？」

「……………え。」

「また次にもってきますから、その時は一番高い金額の人に売りますよ。」

笑顔を崩さず、真琴は言っただけ。

「まあ…………校長先生にはサービスしますよ。あなたが一番権力もってそうですしね。」

呆気にとられている5人を最後に見てから、「それじゃあ、さようなら。」と言い放ち背をむけた。

「待て！」

竜理が真琴にむかって叫ぶ。

「お前はなんのためにこんなことをする？」

しばらく沈黙が続き、真琴は背をむけたまま静かに言った。

「私、「萌え」には人一倍貪欲なんです！」

そう言うと小走りに真琴は教室を出て行った。

そして、独り廊下で真琴は呟いた。

「うふふふ……。やりい！」

……そして真琴は妖しく微笑んだ。

美少女腐女子の暴走！（後書き）

真琴ちゃんが最強になってしまった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0073g/>

あいいり姫の手にキスを。

2010年10月10日19時31分発行